

立春

二十四
節気

立春 りっしゅん

寒さも峠を越え、
春の気配が感じられる。

2016
2/4

文字どおり「春立つ」時節ということで、春が始まる日です。
まだ、寒さのきびしい時期ですが、立春から立夏の前日までが春です。

東風解凍

はるかぜこおりをとく

第一候

2/4~8



ロウバイ

春の兆しとなる暖かい風が川や湖の水を溶かし始めるころ。「東風(こち)」とは春風を表す代名詞です。

黄鶯見睨

うぐいすなく



ウグイス

第二候

2/9~13

山里で「ホーホケキョ」とうぐいすが鳴き始めるころ。春の訪れを告げるうぐいすは「春告鳥(はるつげどり)」とも呼ばれます。

魚上氷

うおこおりをのぼる



サクラマス

第三候

2/14~18

川や湖の水がぬるみ、割れた氷の間から魚が飛び跳ねるころ。春先の氷を「薄氷」と呼びます。

雨水

二十四
節気

雨水 うすい

陽気がよくなり、
雪や氷が溶けて水になり、
雪が雨に変わる。

2016
2/19

この頃になると寒さがほんの少し和らぐのを感じられます。
積もっていた雪が溶け始め、降る雪も雨にかわる頃です。
春一番が吹き、木の芽も出始めます。

土脉潤起

つちのしょううるおいおこる

第四候

2/19~23



オウレン

雪にかわってしっとりとした春の雨が降り始め、大地が潤い始めるころ。「脉」は「脈」の俗字です。

霞始靄

かすみはじめてたなびく



オオイヌノフグリ

第五候

2/24~28

春霞がたなびき始めるころ。歳時記では春に出る霧を「霞」、夜の霞を「朧(おぼろ)」と呼びます。春のかすんだ月が「おぼろ月」です。

草木萌動

そうもくめばえいずる



ミチノクフクジュソウ

第六候

2/29~3/4

草木が土の中や枝々からいっせいに芽吹き始めるころ。草の芽が萌え出すことを「草萌え(くさもえ)」と言います。

啓蟄

二十四
節気

啓蟄 けいちつ

冬ごもりしていた
地中の虫がはい出てくる。

2016
3/5

地中で冬ごもりをしていた虫たちが、地中からはい出るころです。
「虫」とはいいますが、この場合はいわゆる昆虫だけでなく、へびやカエルなど土の中で過ごす様々な生きものをさすことができます。

蟄虫啓戸

すごもりむしとをひらく

第七候

3/5~9



テントウムシ

戸をひらいて顔を出すかのように、冬ごもりをしていた生きものが姿を現すころです。

桃始笑

ももはじめてさく



モモ

第八候

3/10~14

桃の花が咲き始めるころ。花が咲くことを「笑う」と表現。「山笑う」は春の季語です。

菜虫化蝶

なむしちょうとなる



モンシロチョウの幼虫

第九候

3/15~19

青虫がモンシロチョウになるころ。「菜虫」は畑の大きな根や蕪、油菜などを食べる青虫のこと。菜の花が咲いてまさに春本番です。

春分

二十四
節気

春分 しゅんぶん

太陽が真東から昇って
真西に沈み、
昼夜がほぼ等しくなる。

2016
3/20

太陽が真東から出て、真西に入り、昼と夜の長さがほぼ同じ長さになります。いよいよ本格的な春の到来。春分のあとは、昼の長さが長くなっていきます。

雀始巢

すずめはじめてすく

第十候

3/20~24



スズメ

スズメが巣を作り始めるころ。古くから日本人にとって身近な存在の鳥です。昼の時間が少しずつ伸び、多くの生きものが繁殖期を迎えます。

櫻始開

さくらはじめてひらく



サクラ

第十一候

3/25~29

桜の花が咲き始めるころ。桜前線の北上を日本中が待ち望んでいます。お花見の季節の到来です。

雷乃発声

かみなりすなわちこえをはつす



菜の花

第十二候

3/30~4/3

春の訪れを告げる雷が鳴り始めるころ。「春雷(しゅんらい)」は「虫出しの雷」とも呼ばれています。

玄鳥至

つばめきたる

第十三候

4/4~8



ツバメ

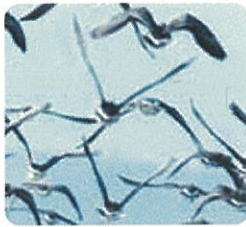
ツバメが南の国から飛来してくるころ。本格的な農耕シーズンの始まりです。「玄鳥(げんちょう)」とはツバメの異名です。

鴻雁北

こうがんかえる

第十四候

4/9~13



ガン

雁が北へ帰っていくころ。雁は夏場をシベリアで、冬は日本で過ごす渡り鳥です。

虹始見

にじはじめてあらわる

第十五候

4/14~19



ヒバリ

雨上がりに虹が見え始めるころ。淡く消えやすい春の虹も、空気の潤いとともに次第にくっきりしてきます。

葭始生

あしはじめてしょうず

第十六候

4/20~24



ヨシ(アシ)

水辺のヨシが芽吹き始めるころ。山野が植物の緑一色に輝く時期の始まりです。ヨシは古来、すだれや屋根、紙などに用いられています。

霜止出苗

しもやみてなえいづる

第十七候

4/25~29



イネの苗

霜が降りなくなり、苗代で稲の苗が生長するころ。間もなく薄緑色をしたじゅうたんのような水田の光景が広がります。

牡丹華

ぼたんはなさく

第十八候

4/30~5/4



ボタン

ボタンが大きな花を咲かせるころ。豪華で艶やかなボタンは「百花の王」と呼ばれています。

蛙始鳴

かわずはじめてなく

第十九候

5/5~9



カエル

カエルが鳴き始めるころ。水田の中をスイスイ泳ぎ、活発に活動を始めます。「かわず」はカエルの歌語・雅語です。

蚯蚓出

みみずいずる

第二十候

5/10~14



ミミズ

冬眠していたみみずが地上にはい出てくるころ。畑土をほぐしてくれるみみずは、動き始めるのが少し遅めのようです。

竹笋生

たけのこしょうず

第二十一候

5/15~19



タケノコ

たけのこが出てくるころ。この頃見られるのはマダケのたけのこでしょう。たけのこは成長が早く、一晩でひと節伸びると言われています。

蚕起食桑

かいこおきてくわをはむ

第二十二候

5/20~25



カイコ

蚕が桑の葉を盛んに食べだすころ。蛾の一種である蚕蛾がつむいだまゆが美しい絹糸になります。

紅花栄

べにばなさかう

第二十三候

5/26~30



ベニバナ

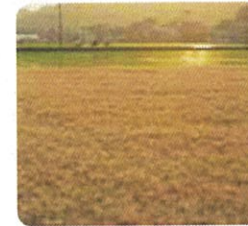
ベニバナの花が咲き誇るころ。ベニバナは紅色の染料や口紅、食用油をとるために古来から栽培されてきました。

麦秋至

むぎのときいかる

第二十四候

5/31~6/4



ムギの穂

麦が実りたわわに黄金色の穂をつけるころ。ここでの「秋」は穀物が成熟する実りの季節を表しています。

蟪蛄生

なまきりしょうず

第二十五候

6/5~9

カマキリが卵からかえるころ。秋のうちに草むらなどに生みつけられた卵から数百匹の子が誕生します。



カマキリの孵化

腐草為螢

くされたるくさほたるとなる

第二十六候

6/10~15

草の中から螢が舞い、光を放ち始めるころ。昔は腐った草がホタルになると考えられていたようです。



ホタル

梅子黄

うめのみきばむ

第二十七候

6/16~20

ウメの実が黄ばんで熟すころ。青いウメが次第に黄色味をおび、赤く熟していきます。梅雨入りもこのころです。



ウメの実

乃東枯

なつかれくさかる

第二十八候

6/21~25

乃東(だいとう)または夏枯草(かこそう)の異名を持つつづば草が、黒ずみ枯れたように見えるころ。



ウツボグサ

菖蒲華

あやめはなさく

第二十九候

6/26~30

あやめの花が咲き始めるころ。端午の節句に用いる菖蒲(しょうぶ)ではなく、花菖蒲のことです。



ハナショウブ

半夏生

はんげしょうず

第三十候

7/1~6

半夏が生え始めるころ。田植えを終える目安とされました。「半夏(はんげ)」は「烏柄杓(からすびしゃく)」の異名です。



カラスビシャク

温風至

あつかぜいたる

第三十一候

7/7~11

暑い風が吹き始めるころ。温風は梅雨明けのころに吹く南風のこと。日に日に暑さが増して、本格的な夏の訪れを感じます。



ツクグサ

蓮始開

はすはじめてひらく

第三十二候

7/12~16

ハスの花が咲き始めるころ。優美なハスは、天上の花にたとえられ明け方に花を開き、昼過ぎには閉じてしまいます。



ハスの花

鷹乃学習

たかすなわちわざをならう

第三十三候

7/17~21

鷹の子が飛ぶ技を覚え、巣立ちを迎えるころ。獲物を捕らえ一人前になっていきます。日本では鷹と言えばオオタカをさします。



タカの仲間

桐始結花

きはじめてはなをむすぶ

第三十四候

7/22~27

桐の花が実を結び始めるころ。桐はタンスや下駄など暮らしの道具に欠かせません。五百円硬貨にも意匠化されています。



キリの実

土潤溽暑

つちうるおうてむしあつし

第三十五候

7/28~8/1

地面からは陽炎が立ち上がり、土がじっとりとして蒸し暑くなるころ。木や草花の緑がますます濃くなっていく時期です。



アサガオ

大雨時行

たいうときどきおこなう

第三十六候

8/2~6

この時期には、台風や集中豪雨、夕立などの大粒の雨が地面をたたきまわります。むくむくと湧き上がる入道雲は夏の原風景です。



キキョウ

二十四
節気

立秋 りっしゅう

秋の気配が感じられる。

2016
8/7秋が始まる日です。立秋から立冬の前日までが秋です。
「残暑見舞い」を出すのは、立秋を過ぎてからです。立
秋

涼風至

すずかぜいたる

第三十七候

8/7~11



エノコログサ

涼しい風が吹き始めるころ。心なしか日差しもやわらぎ、草むらから虫たちの鳴き声も聞かれるようになります。

寒蟬鳴

ひぐらしなく

第三十八候

8/12~16



ヒグラシ

カナカナと甲高くヒグラシが鳴き始めるころ。日暮れに響く虫の声はどことなく物悲しく、夏の終わりを告げているようです。

蒙霧升降

ふかききりまとう

第三十九候

8/17~22



クズの花

朝夕の空気がひんやりと感じられ、深い霧がまとわりつくように立ち込めるころ。秋の「霧」に対し、春は「霞」と呼びます。

二十四
節気

処暑 しょしょ

暑さがおさまるころ。

2016
8/23

暑さが落ち着くころです。残暑がおさまってきて、秋の訪れを感じさせます。

処
暑

綿柎開

わたのはなしべひらく

第四十候

8/23~27



ワタ

「柎」は花のガクのことで、綿を包むガクが開き始めるころ。綿の実がはじけ白ふわふわとした綿毛が顔をのぞかせた様子です。

天地始肅

てんちはじめてさむし

第四十一候

8/28~9/1



ハギ

天地の暑さがようやく収まり始めるころ。「肅」は縮む、しずまるという意味です。天気図には秋雨前線が登場してきます。

禾乃登

こくものすなわちみのる

第四十二候

9/2~6



稲穂

いよいよ稲が実り、穂を垂らすころ。「禾」は稲穂が実ったところを表した象形文字です。

二十四
節気

白露 はくろ

しらつゆが草に宿る。

2016
9/7

朝、草木に露がつくようになります。肌寒さを感じさせる冷たい風が吹き始めます。

白
露

草露白

くさのつゆしろし

第四十三候

9/7~11



ヒガンバナ

朝夕の涼しさが際立つようになり、草に降った露が白く光って見えるようになるころです。

鵲鳩鳴

せきれいなく

第四十四候

9/12~16



セキレイ

セキレイが鳴き始めるころ。セキレイのチチチチという高い鳴き声に聞き覚えのある人は多いはずだ。

玄鳥去

つばめさる

第四十五候

9/17~21



ツバメ

春に飛来したツバメが子育てを終え、南へ帰っていくころ。田畑の害虫を食べてくれる益鳥として親しまれています。

二十四
節気

秋分 しゅうぶん

秋の彼岸の中日、昼夜がほぼ等しくなる。

2016
9/22

春分と同じで、昼と夜の長さがほぼ同じになります。秋分後は、夜の時間が長くなっていきます。

秋
分

雷乃収声

かみなりすなわちこえをおさむ

第四十六候

9/22~27



クリ

雷が鳴らなくなるころ。春分に始まり夏の間鳴り響いた雷も、なりをひそめ、かわりにうろこ雲が現れるようになります。

蟄虫坏戸

むしかくれてとをふさぐ

第四十七候

9/28~10/2



カマキリの卵塊

虫たちが土にもぐり、入口の戸をふさぐころ。冬ごもりの支度をする時期です。冬支度は虫たちの方が早いようです。

水始涸

みずはじめてかるる

第四十八候

10/3~7



ソバの花

田んぼの水を抜き、稲刈りの準備をするころ。井戸の水が枯れ始めるころとの説もあります。

二十四節気 寒露 かんろ

秋が深まり、野草に冷たい露がつく。

2016
10/8

秋が深まり、山の木々の葉も紅葉し始めるころです。穀物の収穫でいちばん忙しい時期でもあります。

鴻雁来

こうがんきたる

第四十九候

10/8~12



ガン

雁がわたってくるころ。清明の時期に北へ帰っていった雁たちが、再びやってきます。

菊花開

きくのはなひらく

第五十候

10/13~17



キク

菊の花が咲き始めるころ。旧暦では重陽の節句の時期で、菊で長寿を祈願しました。

蟋蟀在戸

きりぎりすとにあり

第五十一候

10/18~22



コオロギ

戸口で秋の虫が鳴くころ。昔は「こおろぎ」を「きりぎりす」と呼んでいました。

二十四節気 霜降 そうこう

霜が降りるころという意味。

2016
10/23

秋も終わりに近づき、朝には霜が降りてくるころです。山が紅葉して、美しい赤色や黄色にそまります。

霜始降

しもはじめてふる

第五十二候

10/23~27



ナンテン

山里に霜が降り始めるころ。草木や作物を枯らす霜を警戒する時期です。

霎時施

ささめときときふる

第五十三候

10/28~11/1



コハクチョウ

ときどき冷たい小雨がふるころ。冷たい「霎」をしぐれと読むことも。ひと雨ごとに気温が下がっていきます。

楓蔦黄

もみじつたきばむ

第五十四候

11/2~6



カエデ

かえでやツタの葉が色づくころ。晩秋の山々は赤や黄色に彩られ、紅葉狩りの季節です。

二十四節気 立冬 りっとう

冬の気配が感じられる。

2016
11/7

冬が始まる日です。北国では初雪が降り始めます。立冬から立春の前日までが冬です。

山茶始開

つばきはじめてひらく

第五十五候

11/7~11



サザンカ

山茶花(さざんか)の花が咲き始めるころ。ツバキと混同されがちですが、先に咲くのは山茶花で、花弁の散り方が異なります。

地始凍

ちはじめてこおる

第五十六候

11/12~16



モズ

大地が凍り始めるころ。夜間の冷え込みもいっそう厳しくなり、早朝、サクサクと霜柱を踏みしめて歩くのが楽しい時期です。

金盞香

きんせんかさく

第五十七候

11/17~21



スイセン

水仙が咲き、芳香を放つころ。「金盞(きんせん)」は金の盃のことで、水仙の黄色い冠を見立てています。キク科のキンセンカではありません。

二十四節気 小雪 しょうせつ

寒くなって雨が雪になる。

2016
11/22

北風が吹き、木の葉を落とすころです。里にも雪がちらつくことがありますが、まだ本格的な寒さにはあたりません。

虹蔵不見

にじかくれてみえず

第五十八候

11/22~26



ビワ

陽の光も弱まり、虹を見かけなくなるころ。「蔵」には潜むという意味があります。

朔風払葉

きたかぜこのはをはらう

第五十九候

11/27~12/1



チャ

北風が木の葉を吹き払うころ。「朔風」は北の風という意味で木枯らしをさします。

橘始黄

たちばなはじめてきばむ

第六十候

12/2~6



タチバナ(かんきつ類)

タチバナの実が黄色く色づき始めるころ。タチバナは古代はかんきつ類の総称でした。文化勲章のデザインはタチバナの花をかたどっています。

二十四
節気

大雪 たいせつ

雪がよいよ降り積もってくる。

2015
12/7北風が強くなり、雪が降り出すところです。
山々は雪に覆われ、本格的な冬の到来が目に見えてわかる時節です。大
雪

閉塞成冬

そらさむくふゆとなる

第六十一候

12/7~11



ヤツデ

重く垂れこめた雲に空が閉ざされ、生きものも動きをひそめている冬の様子を表した言葉です。

熊蟄穴

くまあなにもこる



ツバキ

第六十二候

12/12~16

クマが穴に入って冬ごもりをするころ。人々も、この時期は戸外での活動がめっきり少なくなってきました。

鮭魚群

さけのうおむらがる



サケ

第六十三候

12/17~21

サケが群がって川を上るころ。川で生まれたサケは海を回遊し、産卵のため故郷の川を遡上していきます。

二十四
節気

冬至 どうじ

昼が一年中で一番短くなる。

2015
12/22一年中で、夜が最も長く、昼が短い日です。
この日を境に少しずつ日脚がのびていきます。冬
至

乃東生

なつかれくさしょうず

第六十四候

12/22~26



ウツボグサ

夏枯草が芽を出すころ。夏至の「乃東枯」に対応し、うつぼ草を表しています。

麋角解

さわしかのつのおつ



シカ

第六十五候

12/27~31

鹿の角が落ちるころ。「麋(さわしか)」はヘラジカやオオジカのことで、冬のこの時期に古い角を落としします。

雪下出麦

ゆきわたりてむぎのびる

第六十六候

1/1~5



ムギの芽

雪の下で、麦が芽を出すころ。浮き上がった芽を踏む「麦踏み」は日本独特の風習です。

二十四
節気

小寒 しょうかん

寒の入りで、寒気がましてくる。

2016
1/6「寒の入り」ともいわれ、いよいよ寒さのきびしい時期を迎えます。
「寒中見舞い」を出すのは、小寒を過ぎてからです。小
寒

芹乃栄

せりすなわちさかう

第六十七候

1/6~9



セリ

セリが盛んに育つころ。春の七草のひとつで7日の七草粥に入れて食べられます。日本書紀にもその名が見られます。

水泉動

しみずあたたかをふくむ



ヒメオドリコソウ

第六十八候

1/11~15

地中で凍っていた泉が動き始めるころ。寒さのきびしい時期ですが、少しずつ春に向かって変化していく様子を表しています。

雉始鳴

きじはじめてなく

第六十九候

1/16~20



キジ

キジが鳴き始めるころ。オスが「ケンケン」と甲高い声をあげて求愛します。日本の国鳥にもなっています。

二十四
節気

大寒 だいかん

冷気が極まって、もっとも寒さがつのる。

2016
1/21一年で最も寒さがきびしくなるころです。
この時期にあえて武道などの稽古を行うことを「寒稽古」といいます。大
寒

欵冬華

ふきのはなさく

第七十候

1/21~24



フキノトウ

雪の下からふきのとうが顔を出すころ。待ちに待った春の訪れを象徴する植物です。

水沢腹堅

きわみずこおりつめる



メジロ

第七十一候

1/25~29

沢に厚い氷が張り詰めるころ。沢に流れる水さえも凍る一年でもっとも寒い時期で、最低気温の記録も聞かれるころです。

鶏始乳

にわとりはじめてとやにつく

第七十二候

1/30~2/3



ニワトリ

ニワトリが鳥屋に入って卵を産み始めるころ。本来、ニワトリは冬は産卵せず、春の到来を感じると卵を産んでいたようです。

季節ごとの 生きものの情報、画像を 投稿してください。

毎月抽選で
プレゼント
進呈!

福井県里山里海湖研究所では、二十四節気などの歳時記に見られる
時節の生きものの情報や画像を募集しています。

投稿いただいた情報は専用のホームページ上で公開します。

情報をいただいた方の中から、毎月抽選で
プレゼントを進呈します。



①生きものを見つけよう。

時節の生きものや植物などを探してみましょう。

季節ごとの生きものは、里山里海湖研究所のホームページでチェック!

②里山里海湖研究所のHPから投稿。

福井県里山里海湖研究所ホームページの投稿フォームから、

氏名(ニックネーム)、見つけた生きもの、場所、

コメントなどを記入して投稿してください。

生きものを撮影した写真があれば添付してください。

(スマートフォンでもデジタルカメラでもOK)

HPアドレス

<http://satoyama.pref.fukui.lg.jp>



※画面はイメージです。

③HPに生きものの 写真や情報が表示されます。

福井県里山里海湖研究所のホームページ内に、

生きものの写真や情報などのほか、

撮影した場所が福井県のマップ上に表示されます。



■ 郵送・FAXでの報告も受け付けています。

報告する人の名前、住所のほか、生きものの写真、見つけた場所、感想などを記入の上、
福井県里山里海湖研究所まで。

さとやまさとみ

福井県里山里海湖研究所

〒919-1331 福井県三方上中郡若狭町鳥浜122-31-1

TEL/0770-45-3580 FAX/0770-45-3680 Eメール/satoyama@pref.fukui.lg.jp

※許可なく転載、複写、複製を禁じます